第四番

五徳猫

薔薇十字探偵の慨然

百器徒然袋

風

◎五徳猫

◎五徳猫――

七とくの舞をふたつわすれて
五徳の官者と言ひしためしもあれば
この猫もいかなることをか忘れけんと
夢の中におもひぬ

――画圖百器徒然袋・卷之下
鳥山石燕／天明三年

1

「ほら見ろ。右手を挙げているじゃないか」

近藤は満足げにそう云うと、熊のような面を僕に向けた。

髭だらけである。

どうだ、お前にはこの形が見えないのかと罵るように云った後、髭男は右手を握って顔の横に掲げ、置き物同様の格好をした。

剛い髭、手拭いの鉢巻きに褞袍で雪駄と云う盗賊宛らの姿であるから、体躯自体は善く似ていても、まるで猫には見えない。狸か、矢っ張り熊である。

近藤の背後の地面にはそれはもう夥しい量の招き猫が、大中小と取り揃えて置かれている。

二百個はあるだろうか。

近藤は丁度その真ん中で同じポーズを取っていることになる。猫の大群は雨晒しだからどれも煤けていて、近藤もまた煤けているから、まるで八百八狸を引き連れた隠神刑部狸が眷族共共敬礼でもしているかのような絵柄である。

「わかったよ。諒解したからその格好を止めろ」

僕は出来得る限り厭そうに、倦怠感まる出しの顔と云うのを作って近藤を牽制した。これ以上鬼の首でも取ったかのような態度を執られるのはご免だ。

僕の表情などどうせ効き目はないのだが。

狸の親方は案の定更に威張って、どうだ解ったかと云った。

「大いに解りましたよ。我が朋友にして日本一の紙芝居絵師であるところの近藤有嶽大画伯の博識振りには心底驚愕致しました。浅学の図面引きと致しましては、ただ秋の稲穂の如く頭を垂れるのみにございます――だ。気が済んだか」

「いや」

近藤は腕を組んだ。
今度は達磨のようである。
「俺はな、本島。何も浅学な幼馴染みを啓蒙しようと思ってこんな世田谷くんだりまで出張って来た訳じゃないのだ。勿論、米ヨコセ区民大会に出たかった訳でもない」
「そりゃ慥か七年も前の騒ぎじゃないか。その頃はお前、復員してもいないだろうに」
適当な男だ。と――云うより嫌がらせだ。まったく、見た目が豪快な割に嫌味な男である。近藤は続けて、俺の家は代代浄土宗でこの寺は曹洞宗なんだからお参りに来た訳でもないぞと云った。
「却説――本島氏、さすれば我我は、何故に斯様な場所にいるのであろうか」
「煩瑣いよもう。買うって。そこの露店で買って来るから寸暇待っててくれよ。おまけにお守りでもつけようか」
「福銭とか云う奴か。よし、許して遣わそう」

近藤は漸くにッと歯を剥き出して笑った。
僕は舌打ちをして門前の露店に向かった。
ことの発端は十日程前に遡る。それは、ひょんなことから僕が巻き込まれた、美食絡みの国際美術品窃盗売買事件――僕は勝手に山颪事件と呼んでいるのだが――が大騒動の末に一段落して、僕の許に日常が返って来て、すぐのことだった。
事件が終わって、僕はあの探偵の手下から一介の電気工事会社の図面描きに戻った。
そして同じ頃、竹馬の友にして隣人でもある紙芝居描きの近藤は、大好きな時代モノが散散な不評の末に打ち切られたと云う衝撃から何とか立ち直り、絵元に頼まれた探偵モノの紙芝居を不承不承描き始めていたのだった。
題名は『からくり探偵帖』に決まった。白面の貴公子にして私立探偵でもある夢野塔十郎が、助手の新之輔少年と共にバッタバッタと悪を懲らすと云う勧善懲悪活劇――になる予定だった。

面白そうだ、と僕は素直に思った。何しろ、それまで近藤が描いていた紙芝居と云ったら、拷問される女郎だの生き埋めにされる武家娘だのが頻繁に登場する複雑怪奇な時代モノだったのだ。それも僕辺りが見たって眼を伏せたくなる程にリアルな画風だったから、お客である童は間違いなく泣く。絶対泣く。だからその新しい路線は正解だと、僕は何度も誉めた。
ところがこれが進まなかった。
誉めど論せど一向に進まない。やれ鉄砲が描けないの自動車が描けないのと一枚おき、一塗りおきに手が止まる。
で、金がなくなる。
紙芝居描きは日銭を稼ぐ商売な訳で、上手かろうが凄かろうがそんなことは関係ないのだ。描けなければ描けない分だけ収入が減る。それだけなのだ。間が開けば切られる。要するに安定して量産出来る技量こそが紙芝居描きの身上なのである。

絵元だって頭ッから良い作品なんかは欲していない。何でも彼でも、兎に角連続して描き続けて、ウケたなら出来るだけ引き延ばし、ウケなければウケるように路線を変更する、その柔軟さが人気の秘訣となる。そんなことは、素人の僕にだって容易に判ることだった。紙芝居描きは芸術家のように脇目も振らず、職人のように割り切って、流行小説家のように量産しなければならぬのである。
それなのに近藤は、文学者のように悩み、職人のように拘泥り、芸術家のようにスランプに陥ってしまった――ことになる。
で、近藤はすっかりへばってしまったのだった。空腹と不調が相乗効果を発揮して、終に近藤は発熱した。時期外れの流感である。三日寝込んで、近藤の懐は空っぽになった。序でに毎週半ドンの日と休みの日に作画を手伝って小遣いを稼いでいた僕もまた、副収入の道を断たれて大いに困ることとなった訳である。

そして――。

丁度一週間前の日曜日――幾分窶れた近藤が朝っぱらから僕の許に訪れた。頭を掻き毟ったのだろう、まるで石川五右衛門みたいなムシリ頭になった近藤は、最後の銭だと云って僕に硬貨を掴ませると、血走った眼で唐突にこう云ったのだった。

縁起物を買って来てくれ――。

僕は面喰らった。

――縁起物だァ？

到頭乱心したかと思い、僕は聞き返した。

近藤は真顔で、福を呼び込むようなものなら何でも良いんだと云った。そして続けて、

この銭で腹を満たすのは容易い――。

しかし腹なんてものはすぐに空く――。

満腹感は精精半日しか保たないのだ――。

と云った。

それはそうだろう。

喰い物は喰ってしまえばそれまでだ。

腹は膨れても、仕事をしなければ萎んだ財布は膨らまない。だからと云って縁起物なんか買ったところで、たぶん財布は膨らまないのだ。同じことである。否、縁起物では腹すらも膨れない。損である。

どうやら近藤は、崖ッ縁に立ってしまえば厭な仕事も出来るだろうと云うような肚であるらしい。慥かに、なけなしの銭を使い切ってしまえばもう後がない訳で、餓死したくなければ無理にも働かずばなるまい。

それなら何か喰えと僕は主張した。喰わなければいずれは死ぬ。死んだら仕事も出来ない。

この場合取り敢えず何か喰って仕事をするのが一番建設的な態度だろう。何を買ったって金を使い切ると云う状況は同じことなのである。縁起物を買おうが芋を買おうが、崖ッ縁に変わりはないではないか。

僕がそう告げると、近藤は腹が膨れて良い考えが浮かぶとも思えないのだ――と云った。

縁起物は腹こそ膨れんがな――。

気持ちが膨れるだろ――。

近藤はそう続けた。どうもご利益を信じている訳ではないらしい。縁起の良い気分を励みにして仕事をする、やがて財布も膨れる、そうなれば腹の方も膨れる、いい案配だと、まあそう云う理屈であるらしかった。

――判るような解らないような。

判らないような解るような。兎に角僕の方も混乱してしまった。

そして結局、悲壮な割に愛敬のある友人の、その哀願するが如き武骨な瞳に絆されて、僕は縁起物を買いに出たのだった。

迷った。

時節柄熊手では凡庸だ。みんなが買っている。経験上、これは間違いなく文句を云われる。しかし近藤は何か熱心に信心をしている様子でもないし、特定の寺社仏閣のお札を渡すのも何か変だ。

御守りと云うのも一寸違うだろう。

何かを祈願すると云う訳でもないのに目抜き達磨と云うのも妙だ。

思案に暮れて店員に尋ねると、ヤレこれは疱瘡除けだのこれは盗難除けだの、火伏だ縁結びだと、どんなモノにも何かしらご利益がくっついている。結局あれこれ吟味の末――。

僕は招き猫を買った。

福を招く。

何と単純かつ明快な縁起物だろう。

――もってこいだ。

そう思ったのだ。それが間違いだった。

招き猫を渡すと近藤は眼を剝いて首を傾げた。

そして、さんざ猫を眺め回した末に、

これはお前、違うぞ――。

と云ったのだ。

何が違うんだと問うと、近藤は――こともあろうに、これは福を呼ぶ猫じゃないとほざいた。

そんなことはない。ない筈――だった。
大体招き猫が福を招かず何を招くと云うのか。福以外のものを招くようなロクでもないモノなら、有り難そうに売っている訳がない。何を血迷っているのかと強く云い返すと、近藤は不平を満面に浮かべて、
だってお前、これ左手挙げてるじゃん――。
と云ったのである。
僕が啞然としていると、近藤は駄目だ右じゃなくちゃなどと云って、折角の招き猫を万年床の上にぽいと置いたのだった。
僕は――。
大いに臍を曲げた。
貧して窮する旧友哀れと思えばこそ、僕は訳の判らない頼みを引き受けてわざわざ街まで出掛け、この有り難い猫様を求めて戻ったのである。それにケチをつけるとは、何たる横暴、何たる恩知らずであろうか――。

そもそも近藤は縁起物なら何でも良かった筈なのだから、なら僕が下駄を買って来ようが褌を買って来ようが有り難い有り難いと押し戴くのが筋ではないのか。だいいち、店員は招き猫に種類があるなどと云うことは一言も口にしなかったと思う。他の縁起物に就いてはあれだけ細かく説明能書きをくれたのに、店員が猫に就いて語ってくれたことはと云えば、べろ掛け付きは高価くって、座布団付きならもっと高価いと、ただそれだけのことだった。加えて店に並んだ猫共は皆一様に同じ方の手を挙げていたと思う。反対側を挙手している猫は一体たりとも見かけなかった。見ていない。
そこで僕は強く主張した。
招き猫に種類などない――と。
右も左もないのだ。そんなのはきっと作る奴の勝手に違いないではないか。いや、あれはたぶん規格品なのだ。だから全部左手を挙げているに違いないのだ。

しかし――近藤は本気で知らないのかよ、と呆れ声で云った。そして思い切り洟をかんだ後、僕の顔を馬鹿にするように眺めて、
だってこれはお前、客を呼ぶ猫だよ――。
と云ったのだった。
近藤に依れば、左手で招く猫は客寄せ、右手で招く猫こそが福寄せなのだそうである。僕が買って来た猫は慥かに左手が挙がった方であり、それが本当なら客寄せ猫である。金もない熱もある仕事も進まないと云うこの非常時に客なんかが来ちゃったら俺はどうすればいいんだよと云って近藤は顔を歪めた。
僕の方は、いっそう酷く臍を曲げた。
慥かに左右の別はあるのかもしれない。左挙げのご利益は客寄せなのかもしれない。かもしれないが。
仮に、仮にそうだとしても、それの何処がいけないと云うのか。

ご利益があるならそれでいいじゃないか。商売をしている者にとっては客こそが福そのものなのである。ならば一般家庭に於てそれは矢張り、純粋に福を招くと取るべきなのだ――僕はそう云った。
しかし近藤は譲らなかった。
右は福、左は客と云うのは決まりごとで、これは互換性のないものだと云うのである。近藤曰く、客は人と云い換えられる、つまり右は福徳、左は人徳だ――と云うのである。慥かに人徳と福徳は別なものだ。人徳は財を成す場合もあるが、そうでない場合もある。
富貴だけが福ではないのだ。
例えば客商売をしている者や商店などにとってみれば人徳は富に直結するものとなるのだろうが、財を成さぬ人徳と云うのもあるだろう。思うに人徳のある人物と云うのは金銭に執着しないものだ。同様に財産を成す以外にも福徳のありようと云うのはあるだろう。

すると福徳即ち富と直結させることも出来ない訳で、人を集めたり福を呼び込んだりした結果、お金も儲かると云うことはあるかもしれないが、それも飽くまでひとつの結果に過ぎないと考えることも出来るだろう。

そう云うことなのかと問うと、違うよそうじゃないよと、近藤はまたもや僕の意見を否定した。

右手は金だ金――。

近藤は親指と人差し指で丸を作った。

右手を挙げている猫は間怠っこしいことは抜きで金を呼ぶ、まさに単刀直入な縁起物だよと、近藤は実に嬉しそうに云った。

――何だこいつ。

すっかり恢復している――ようにしか見えなかった。深刻な感じもすっ飛んでいて、妙に欲まで出始めている。いや、欲が溢れ出ている。

――俗物だ。

絵に描いたような俗物だ。近藤は。

僕は益々馬鹿馬鹿しくなって来たので、もういいじゃないかどうでもと投げ遣りに云ったのだが、近藤は頑として譲らず、虎の子で買って貰ったのだから妥協はしないぞなどと勝手な戯言を吐かした。

でも、僕もまた譲りたくはなかった。

だから僕は――そんな決まりごとはないと云い張ったのだ。そんなこと何時決まったのだ。誰が決めるのだ。根拠はあるのか。近藤は根拠はあるぞと云って右手を差し出し、金を出すのも受け取るのも右手だからさと答えた。それは右利きだからだと僕は返した。死んだ婆さんに聞いたんだと近藤は更に突っ撥ねた。

そして僕達は賭けをしたのだ。

変な賭けだった。先ず近藤の一週間の食事の面倒を僕がみる。近藤の方は文句を云わずにその一週間、無理矢理にでも紙芝居を描いて、週末までに纏まった金を作る。それが互いの条件である。その上で、両者自説を裏付ける憑拠を捜す。

一週間後に決着をつける。

もし僕の意見が正しければ、近藤が稼いだその金は全額僕の手に渡る。而して近藤の主張が正解ならば、僕は一銭も貰うことが出来ない上に、その右手を挙げた猫とやらを買って近藤に進呈しなければならない――そう云う賭けである。

近藤は働いた。そんな馬鹿らしい賭けでも、意地になれば働けるのである。描けない描けないと云いつつ結局怠けているだけなのだ。僕は一週間、朝晩懸命に飯を作ってはせっせと隣家に運んだ。

そして今日、その変な賭けに決着をつけるべく僕達はわざわざ世田谷は豪徳寺までやって来たと云う訳である。

何故豪徳寺なのかと云えば。

あれこれ尋き回るうちに、僕は豪徳寺が招き猫発祥の地だと云う興味深い情報を得たのである。情報源は僕の奉職する工事会社で経理を担当している青田太輔と云う調子のいい中年男だった。

青田氏の談に依れば　どうやら彼の寺は猫寺とまで呼ばれているらしく、奉納された絵馬は全て招き猫の絵であり、境内には猫塚なるものまであって、そこには大量の招き猫が置かれている――とまで云うのである。そこが正しく発祥の地であるならば、縁起のひとつふたつ伝わっているだろうし、ならば猫の挙げる手に就いても、そのご利益に就いても正確なことが判るのではないかと僕達は考えた。真実そんな状況ならば、住職にでも尋げば必ず答えてくれるだろう。だが。

尋くまでもなかった。

豪徳寺の猫はどれも右手を挙げていたのである。

それは見事に挙げていた。遠目から見たって、それはもう確実に判ったのだった。ずらりと並んだ大きな絵馬も、まるで僕を小馬鹿にするかのように揃って右手を挙げていた。加えて門前の花屋の前にまで招き猫の露店が出ており、そこにも右手を挙げた連中が勢揃いしていた。

言葉を失った僕がそれらをぼうと眺めただけで、店番の老婆は尋きもしないのにこう語ったのだった。

福を呼ぶ招福猫児ですよう――。

右手挙げてござるでしょう――。

これが他とは違います――。

福徳を呼ぶ猫ですよう――。

その段階でもう完全に勝負はついていた訳なのだが、すっかり血色の良くなった近藤は嫌味にもそこでは何も云わず、悠然と境内に入るとすたすた猫どもの前まで無言で進んで、二百体の猫を一通り眺め回した後で、まるで勝ち誇ったかのような髭面を僕に向けて――。

ほら見ろ、と云うことになった訳である。

釈然としなかったけれど、負けは負けである。何だか意地を張った所為で物凄く損をしたような気がした。こんなことなら達磨か、素直に熊手でも買っていれば良かったのだ。

僕は少しばかり不貞腐れて門を潜り、忌ま忌ましい露店の前へと至った。僕が真正面に立つと、店番の老婆はご丁寧にもまた同じことを云った。

「福を呼ぶ招福猫児ですよう。右手挙げてござるでしょう、これが他とは違います、福徳を呼ぶ猫ですよう――」

――さっきも聞いたって。

僕は自棄糞になって、本当にご利益あるんですかと益体もないことを訊いた。

「はあ、どうも有り難うございます」

全然聞いてない。

問いに答えるどころか老婆は商品を指差して、どちらに致しますかと反対に問うて来た。

「ええと、こっちが土人形、こっちが焼き物ですがなあ。どちらも有り難い霊験がございますでよ」

善く見ると慥かに猫は二種類ある。

腹に招福と記された土製のものと、丸に福の字が描かれた陶器製のものだった。

いずれも白猫で、土製の方には紅い首輪が描かれている。

「どう違うんですか」

「ですからこっちが土人形、こっちが焼き物でございますよう。どちらも有り難い招福観世音菩薩様の眷族でございますからなあ。こちらのご本尊様でございますから。これを崇め祀れば吉運たちどころにやって参りますでなあ」

「何で――右手なんですか」

「左手挙げてるのは客を呼ぶ云うて、客商売の人が買いますなあ。ここのは右手でござります」

理由は知らないようだった。

顔がどれも違うので一個一個念入りに見た。こうなったらせめていいものを選びたいと思ったのだ。

結局土製のものを二つ買うことにした。土を選んだのは安かったからではなく、可愛いと思ったからである。二つ買ったのは、近藤に二つやろうと云うのではなく、自分の分である。

当然、上手に顔が描かれている方を僕が取るのだ。この猫に招いて貰い是が非でも散財した分を取り戻さねばなるまい。

猫を片手に再度門を潜ると、すぐに近藤の姿が見えた。

近藤は招き猫の横の石碑の前で何やら僧侶と話し込んでいた。

僕は即座に落語の『お血脈』を思い出した。近藤の五右衛門面と寺院の景観との取り合わせからの連想だろう。

よもや泥棒と間違われた訳でもあるまいな、いやあの男ならあり得るかと、そんな愚にもつかぬことを考えもしたのだが、残念乍ら僕が辿り着く前に僧侶は礼をして去ってしまった。近藤はそうかなる程などと頷いている。

「何がなる程なんだい。ほら、貴君の一週間の労働報酬と無銭飲食とを保証してくれる有り難いお猫様だ」

近藤は猫を受け取ると上下裏表を嘗めるように見て、無銭飲食とは人聞きが悪いなあなどと云いつつ、嬉しそうに懐に仕舞った。
「それじゃあ喰い逃げみたいじゃないかよ」
「一週間タダで飯を食ったじゃないか」
「賭けに勝ったんだよ。それより本島、俺はこの寺の由来を聞いたぞ。ここはな、いいけ菩提寺なんだな」
「イイケとは何だ」
善く判らなかった。いいだよいいと云って近藤は本堂の方に歩き出した。
「お前は桜田門外の変を知らんのか。井伊直弼を知らんとでも云うのか？」
それくらいは知っている。近藤の発音が悪いのである。
「じゃあ何か、この寺に井伊直弼が葬られていると云うのか？　それでどうして招き猫が右手を挙げなくちゃならん」
「直弼じゃないよ。先祖だ先祖。家康と共に伊賀越えし、数数の武勲を立てて初代彦根藩主になった井伊直政の息子で、病弱の兄に代わって二代藩主まで務めた井伊直孝だ」
「それがどうした」
まるで話が見えない。
「その直孝さんの墓がここにあると云うのか？　そりゃ変だな。彦根城主なら彦根に埋葬されるんじゃないのか普通」
近藤はこれだから配線工は困るなあなどと職業差別的なことを口にした。
「この辺はな、江戸近郊の井伊家領地なんだよ」
「近郊って――都内じゃないか」
「昔は違ったんだって。都も区もねえさ。井伊直孝はな、徳川秀忠の遺命を受けて幕政に参与して、寛永十一年から亡くなる万治二年までご府内にいたんだよ。知らねえのか」
それは知らない。知らないが。

「だから何なんだ」
「まあ聞け」
近藤は大判の猫絵馬の真下の置き石に腰を下ろした。
「この寺はな、その昔は貧乏な荒れ寺だったんだな。でもって、年老いた住職の秀道和尚てェ人がひとりで守ってたんだそうだ。その住職は白猫を飼っていて、これが猫っ可愛がりだった」
「喰うや喰わずで猫なんか飼うのか？」
慈悲の心だよと近藤は手を合わせた。
「僅かな食料を分かち合って細細と生きていたのだな。自が食を割いてまで禽獣を生かそうなどと云う心懸けァ、中中出来るもんじゃないだろう。ただのご仁ではなかろうて。でな、この和尚、或る日その猫にこう云ったんだそうだ。お前も恩義を知るのなら、何か果報を招いておくれ――」
「腥いな――」
僕は話の腰を折るようにそう云った。
機嫌が悪い訳である。
「――そうした布施と云うのは無償の施しであるべきじゃないのかね。見返りを求めると云うのは仏道に反しちゃあいないかね」
僧と雖も人の子だと近藤は都合のいいことを云った。
「喰わなければ死だ、死ねば仕事は出来ないぞと、それはお前が云ったことだぜ本島。坊主だって同じだよ。死んじまっちゃ布教も供養も出来ないじゃないか。大体坊主が死んだら誰が菩提を弔うんだ。まあ、これが坊さんでなかったら、恩を返せたァ云わないな。返せねェなら肉体で返して貰おうと、まあこう云うことになる」
まるで江戸時代の烏金のような台詞である。
「猫がどうやって躰で返すんだよ。猫を吉原にでも売るのかよ」
「違うって。猫を喰うんだよ。普通は」
「喰うか？」

「喰うさ。猫は陸河豚と云って美味いんだ。大体話して聞かせたって猫が恩を返す訳がないだろ。猫ってのは三年飼っても三日で恩を忘れるんだ。しかも小判見たって価値が判らん。そう云う獣だ」
まあ、動物相手のことであるからいずれ冗談には違いない。
「ところが」
近藤は講釈師のように膝をぺたりと叩いた。
「この猫ァ恩を返した」
「鶴みたいだな」
恩返しと云えば鶴である。
「まあ、普通はな、猫は仇討ちの方なんだがな。鍋島の猫騒動を始め、佐賀有馬と化けて取り殺すのがお家芸だ。ところが」
「恩を返したのか。猫が？　どうやって？」
「招いた訳だ」
近藤は再び右手を握って顔の横でおいでおいでをした。

「この門前の道――ってえことは、そこの前の坂下の道だな。そこをだな、件の井伊掃部頭直孝様が通り掛かったと思いな。まあ、この辺りは森だからな、鷹狩りの帰りかなんかだろうさ。そこにな、白猫がひょいと出て、こう」
「だから猫の真似は止せよ近藤。熊か狸が耳を掻いてるようにしか見えないんだよ」
失礼だと近藤は怒った。
「見たまんまだよ。それより、そんな偉い人を猫が招いたと云うのか？」
「人が招いたりしちゃ、場合によっては無礼打ちだがな。そこはまあ獣だからな。直孝様ァ少少疲れてたんだろう。猫招きに誘われてこの寺へと至り、折角だから暫し休ませてくれい――と、こう和尚に云った訳だ。聞けば猫が案内したと云う。和尚は吃驚だな。で、まあ汚い本堂に上げて薄い茶を出した」
善く判るなと云うと、貧乏だったんだぞと近藤は答えた。見て来たような嘘である。

「んで、まあ殿様も退屈だろうと和尚は法話を垂れた。まあ、坊主に出来ることと云えば説教かお経だわな。これが中中に有り難い。身態は小汚いが善いことを云う、などと思ってるとな、一天俄かに掻き曇り、夕立ちの落雷のてェ大騒ぎ。もしも猫が招かなんだら、お殿様ずぶ濡れ間違いなしだぁな。これは奇異なる縁と直孝様ァ大いに驚き、秀道和尚に帰依して、以降この寺を井伊家の菩提寺と定め、田畑など寄進して厚遇したと、まあこう云うこったな」
なる程、それは猫が招いた福ではあろう。
「それでその猫はどうした。化けたのか？」
「何で化けるか。まあな、この寺はそれまで弘徳寺てェ名前だったのだそうだ。それが万治二年に直孝様が亡くなられて、ここに葬られる際にだな、戒名の、豪徳天英久昌院だかから一部戴いて、豪徳寺と改め今日に至ると、まあこう云う具合だな。猫はまあ死んだんだろう。その墓があの招き猫だらけの石碑だそうだ。猫塚と云う」

万治と云えば相当古いなと、近藤は腕を組んだ。
「この寺が招き猫発祥の地と云うお前の同僚の情報は、まあ、正しかった訳だな」
「そうかなあ」
僕は何となく納得出来なかった。
「で――どうしてここの猫は右手で、他は左手なんだよ」
「そりゃあ」
近藤は左右に一度ずつ首を曲げて、
「ここの猫が右利きだったんだろう」
と云った。
「じゃあここ以外の猫は左利きなのかよ。変だろう」
「負け惜しみか」
「違うって。説明になってないじゃないか」
僕はもう一度猫塚の方に目を遣った。
人影があった。
さっきは誰もいなかったと思う。

二つの人影は屈んでいて、お参りでもしているように見えた。
猫塚の背後は墓場だから、墓参りかとも思ったが、どうもそうではないようだった。影は——女のようだったが——どうやら猫塚を拝んでいるらしかった。近藤も気がついたようで、あれはどう云うのかなあ、などと云った。
暫く眺めていると、影のひとつがすっと立ち上がった。
思った通り小娘だった。
渋めの橙色の着物に前掛けを締めて、おまけに襷まで掛けている。旅館の仲居のようないでたちである。しかし髪型だけはどうにも洋風で、その装いに合っているのか合っていないのか、僕には判じ兼ねた。
その小娘はまだ屈んでいるもうひとつの影に向けて、何かぺらぺらと引っ切りなしに話し掛けているようである。
肩に掛けた手の形やら優しげな仕草など、如何にも慰めているかのように映るのだけれど、見ようによっては責めているように見えないでもなかった。
そう感じられたのは、どうにも小娘の口から出る言葉の所為らしかった。内容までは判らぬが、威勢が良いのだけは判る。慰めるのであれば、あんなにぽんぽんと啖呵を切るような口調にはなるまい。
屈んでいる方は——こちらも同じような服装だったのだが、遠目からの印象は幾分地味で、年齢も小娘よりはやや上であるように感じられた。そう見えたのはどうやら髪型の所為だろうと僕が気づいたのは、その女性が立ち上がった後のことだった。
「ありゃ何処かのお女中かな」
近藤が云うと如何にも時代懸かって聞こえる。
「何か——凄く変なことがあったようだなぁ」
「おい。聞こえたのかよ」
お前は聞こえなかったのかよと近藤は歯を剝き出した。

「遠いじゃないか」
「あの娘、声でかいじゃないか。全部は聞こえなかったが、かなり変な内容だったぞ。猫が化けたとか、母親が入れ替わってるとか」
「母親が入れ替わる？」
何だそれは。
「入れ替わるって——何だよ」
「俺に尋いたって知るか。でも何だか面白そうだなあ。一寸お前、尋いて来いよ。あのお女中はどうも傷心の様子だが、娘の方は元気が良さそうだから平気だろう」
近藤は太短い指で二人の女性を指差した。
「娘って——あれは母娘なのか？」
「おい、そりゃねェだろう。一人は精精二十七八。もう一人は二十歳前ってとこだな。そんな親子がいるかよ」
本当ならそんな母娘はいないだろう。近藤は他人の年齢を値踏みするのが得意なのである。
白浪風の我が友人はまるで日本駄右衛門のように威張って、ほら行って来いよと僕を突いた。
「ここで会ったのも何かの縁だぞ」
「そんなこと云ってたら都電には乗れないだろうが。縁が寿司詰めになってるじゃないか。袖振り合うどころか密着してるぞ。それにな、何で僕が行かなきゃならないんだよ。興味があるのはお前だろうが。どうせ紙芝居のネタにでも——」
そんなことを云っているうちに二人はどんどん僕達の方に近付いて来た。僕は思わず近藤の陰に隠れた。
娘の大きな声が僕の耳にも届いた。
探偵がさ。
相談でもさ。
榎木津だっけな。
「え——えのきづぅ？」
僕は大声を上げた。